

暗い所にいた。目を覚ましたつもりだが、よく見えない。続いていた頭痛は治まっている。いやに静かだ。騒々しい物音を伴わなければ生活ができない上の階の住人は、どうしただろう。夫でよくうなされた。

枕元から離れた所に置いてある目覚まし時計を取りに行く。ために立ち上ると、違和感に気づく。家ではない。土の上に寝ていたのか、堅くて、ざらざらする。地面が薄茫昧りとしている。私はどこにいるのだろうか。

自殺した所迄は覚えている。庖丁で頸動脈を切った。自殺を試みたことは何度もある。手が震え、何枚遺書を書いたか分からない。死に損なうたびに捨てた。新たに書いた。本当に死ぬ時は、強い決意がいるのだろうかと思った。違った。勘違いがある丈だった。私は分ったように感じた。理想と自分の距離、世界と自分の距離、ずっと曖昧だったその距離が、仕事をし、少しずつ生きるたびに分つていくような気がした。勘違いは、手の震えを糸かに鎮めた。

歩こうかと思ったが、やめた。周りを見渡す。暗やみだが、息遣いが聞えた気がした。そつと手を伸してみる。ふれた。

「だれ」

私が言ったものか相手が言ったものか分からない。震えた声だった。私かもしれないなかった。相手は一步前に出たらしく、顔が少し現れた。かわいらしい顔をしたこどもだった。背は私より随分低い。金髪の巻毛で、黒い眼をしていた。

「ぼくの名前を聞いたの」

こどもが言った。

「それともぼくの種類」

「どっちでもいい」

「アセビだよ。聞いたことぐらいはあると思うけど」

私は「ああ」と言った。思い当たらないものを、どことなく聞いたことがあるように振舞うのが私の癖だった。夫でいて、相手が「本当に知ってるの」と疑がっても話しを掘り下げてもいいような余地を残すのも癖だった。

「なんで死んだの」

「なんでかな」

「まあなんでもいいんだけど。こう訊くのが決りなんだ。色々な人がいるけどさ、何億人と聞いてると、どんな言葉もいつか陳腐になるんだ。最近多いのは『うっだから』かな。時代の流れってというのが、あるみたいだね。それもいつか飽きられる」

私は頷突いた。そう言われると、理由を言うのが憚られた。どうせ物珍らしい理由でもない。私はこのこどもに陳腐と言われることを恐れた。私の自尊心と虚栄心とは、死んでもなお治らない。

「で、なんでなの」

「なんでもいいなら、聞かなくていいじゃないか。夫に陳腐だなんだと言われると話しづらい」

「いや、夫は一般論の話だよ。夫々事情があるだろうから、夫々のことまでばかにしたりしない。教えてよ」

「人間が嫌いだからだよ」

「ふうん」

予期した通り、アセビは大した反応を示さなかった。だから人間がきらいだ。私は相手がどのような反応をしても不快に思うだろう。アセビは私を見上げた。

「じゃあ人から離れて暮したりしなかったの」

「この国には所有権というものがある。戸籍もある。まともになどこかへ行って暮そうとするなら、誰かから土地を買わなければいけない。建物は？ あればいいが、なければ自分で作るか買うかしなければならぬ。知識もないし金もない。前準備がいる。自給自

足をするにしても、初めは土地を耕やし種を仕入れ収穫し生きていく限り続けなければならぬ。しかし本当に死ぬ気になって逃げるのであれば不法に住み着けばいいし日本に拘泥する必要もない。おれが現代に生れて軟弱なせいだと言われれば夫迄だ」

「日本って国の名？」

「そうだ」

「現代って」

「おれが生きていた時代だ」

私は言っただろうかと思った。私とアセビでは共有しているものがない。だから共有している筈の前提を捨てなければならぬ。規模の違いはあっても、そんなことは生きていく間から何度もあつたじやないか。

「ありがとう。じゃあ、行こうか」

「どこへ」

「旅だよ。案内しよう。ずっと続けてきたことだろう」

私はアセビに躓がって歩いた。暗やみには、少しずつ目が慣れてきた。岩しかない山を歩いているような感じだ。

「川が、あるかと思ったんだけど」

「川？」

「そう、おれの国では、そういう伝承がある。川を渡ると帰ってこないってな」

アセビは笑った。

「いつだって、どこにも帰れないじゃないか」

私はその意味を考えた。

「そうかもしれない」

「時間が経過する、過ぎていくものである以上取り返しなんていつでもつかない。だから一瞬一瞬を精一杯生きようっていうのがその現代の流行りなんだろう」

「よく知ってるな」

「話だけは聞くからね。それに肯定的な人もいるし、否定的な人

もいる。どっち派かなんてのは大した問題じゃない筈だけど、時として夫が重要になるらしいね」

「肯定派は夢や希望を見ようと言い、絶望を乗り越えて進もうという。否定派は現実にはどうすることもできない壁もあり、何もかもを乗り越えようとするのでなく、地に足を着けて進もうという。或は進むことを拒否する。正確にはどっち派につくかということ
が重要なんじゃない、自分はこういう思想をもっていると誰かにアピールすることが重要なんだ」

「きみはどっち派」

今度は私が笑った。

「否定派だよ。だから自殺した」

私達はしばらく黙々と歩いた。一年ぐらいは経ったかもしれない（あくまで私の感覚だが）朝もなければ、夜もない。私は聞いた。

「太陽は、光りはないのか」

「光り？」

「すべてを照らして、明るく、誰もが持ちたいと願う、或は卑屈の対象になる、まぶしいものだよ」

「そんなものはないよ。ここはずっとこうだ」

「ここには暗しくない」

「暗？」

「光りの蔭に出来るもの、太陽が沈んだ後に来るもの、星が輝やく為のものだ。心にも暗があつて、夫で人は犯罪を犯す」

「そんなものはないよ。ここはずっとこうだ」

言われてみると、ここに来た当初は暗いと思っていたものが、今は明然と見える。なれるということだろう、人は在らゆることに。ではなぜ私は自殺した、なぜ生きることになれなかった、なぜ下らない人間というものになれなかった、或はこんなものだと諦めなかった。自分も他人もこんなものだと見限ればよかったじゃないか、しかし見限れば夫こそ生きる意味なんてない。

アセビが立ち止っていたことに漸やく気付いた。一年ぐらい経つ

ていただろうか。私は聞いた。

「なぜもう歩かないんだ」

「ついたからだよ」

「どこに」

「きみの記憶だ。原因と経過とを知る為に」

「さっきからなぜ知らなきやいけないんだ。理由も経過も、死んだ後では過たことじゃないか」

「退屈だからだよ。ぼくの仲間には、原因を知ることと未来へ活かせるなんていう奴もいるけどね。ぼくは人間なんて変りやしないと思ってる。文明が進もうと時代が変わろうと同じことで悩み苦しみ死ぬ。君らの時代は随分便利になったようだけどね、知ってたかい、『便利』なもの、『必要』じゃないから便利なんて名前がつけられるんだよ」

「必要なものなんて今は殆んどない」

「それも違うと思うな。必要なものは昔から大して変わっていかない。ものや情報が溢れたから相対的に薄まって見えるだけだよ。人間が進化するのなんて何百万年も先のことで、少しの変化でぎやあぎやあ騒ぐのも愚かしい、しかしアセビのぼくが人間のことを兎や角言うのも可笑しいね、ぼくは他の受け売りを話すのが好きなもんだからつい、聞き飽きた説を失礼した」

アセビは手を前へ拡げた。

「さあ、これが君の来歴だ。解説してくれよ」

「解説って言ってもな……これがぼく？ 赤ん坊の頃の記憶なんてぼくらは普通ないんだよ。ああ、母さん若いな、父さんも。これは誰だろう、母さんの友達かな、見たことない」

「よく泣いてるね」

「他人のこともみたいだな。とても自分という感じがしない。しかしああ火見たいに泣くと何だかむず痒いね。迷惑を掛けてすまないという気になる。ああ、もう一人生れたね。あれは多分弟だよ。二歳下なんだ。なんだ、可愛い顔してるな。ぼくはよちよち歩いて

物珍らしそうに見てる。うわ、叩いてるよ……思いつ切り怒られた。嫉妬かな、単に取扱かいが分らなかつた丈かな。こう客観的に見てもあるだね、弟の方が整った顔立をしてる。小学生くらいでもわかしくなったよ。弟はかつこ好くなつて小学生にして彼女作つたりしてた。ぼくは冴えなくて初恋だつて中学生の終り頃じゃないかな、告白もしなかつたけれどもね。弟とは仲が好かつたと思うよ、けんかばつかりしてたし、性格も顔も全然似てなかつたけど。でも弟が中学生になつてから、俗に言うと愚連ちやつてね。つまり、気性が荒くなつた、或は荒く見せようとするようになったんだ。ぼくはまじめで、他人と殴り合いの喧嘩もしたことがなかつたから、怖かつた。時々話すといつもの弟に戻るものがあつて、だから夫を信じて上げればよかつたんだ。或日友達に言われたよ。『お前の弟が夜バイク乗つて走り回つてるの見たぞ』つて。弟は中学生で、ぼくの国じゃ中学生じゃバイクは運転できないんだ。つまり不法に運転してることになる。ぼくは聞いても何もしなかつた。『バイクは危ないからやめておけ』つて一言でも言えば違つてたんじゃないかつて、思うことがある。弟は中学三年の秋、事故を起して死んだ。ぼくは高校二年だね、大学受験を控えてて、ぼくの学校ではもうみんな受験に意識を向け始めてる時だつた。母親は泣いたよ。『私のせいだ』『私のせいだ』つて叫んで收拾がつかないくらいだつた。父親は、割合に寡黙な人で、ほら、母親の背中をさすつて上げてる。ぼくはご覧の通り突つ立つてるだけ、役立たずだよ。頭ん中じゃ『いやおれが悪かつたんだ』つて母親に言おうかそればかり考えてたんだ。言おうが言うまいがそんなことはどうだつていいんだよ。内容なんてどうだつていい。言つても、言わなくても、行動を起して、両親に寄り添つてやればよかつたんだ。一緒に悲しみをただ吐き出せばよかつたんだ。弟は、弟と、もつとたくさん話しをすればよかつたんだ。ところで、これ、事故の現場は見れないの」

「君達が、自分以上のことを知れるかい」

「そうだね：：ぼくは、それから、死ぬことを考えるようになった。当世風とうせいふうの肯定派なら弟の分まで生きようって奮起ふんきする所なのかもしれないね。夫それについては率直に自分の暗愚あんぐぶりを認めるよ。段々人と距離を置くようになったのもこの頃だった。いや、素もとからある程度左右そいう性格だったんだろね、ぼくは親友や恩師なんでものができたことがなかった。夫それは、現代の人間の質が大したものじゃないということもできるし、左そも左そも人間なんて下らない生き物だということもできるし、ぼくが頭こっぺを垂れて教こえを乞こわなかった、自分から心を披ひらかなかった、ということもできると思う。理由なんて確定しないから、何なんとでも言える訳さ。弟が死んで、ぼくは、こんな下らない人間に囲まれて、自分の下らなさを意識しながら、生きていくのかなと思った。思うと勉強に身が入らなくなった。夫それはぼくの甘えだろうと思う。いい人間は一杯いっぱいいるんだ。自分の理解を示したくていうんじゃないよ。いい人間は一杯いっぱいいる、心底しんぞこ下らない、余す所なく下らない人間なんて存在しない。どんな人間にもいい所、感心すべき、学ぶべき点は必ずあるんだ。でも同時に、徹底的に、余す所なく完成された人間というのも存在しないじゃないか？ 出会っていないだけ、どうして自分が成なろうとしない、批判はあるだろうと思う。でも人間の可能性を信じ得るほど、人間としての正しさを目指して、高潔で、自分が君子くんしだと、自他共に認める生き方をする人をぼくは知らない。弟が死ぬまでは、正しく生きなくちゃと、自分の愚劣さに、悩んで苦しみながらも完成しなくちゃと進もうとしたんだどんなに遠くて困難でも。でも人は死ぬじゃないか。野心があっても能力があっても人に好かれても下劣でも聖人でも死ぬじゃないか。それまでは勉強は修養の一つだと思ってたんだ。頭はよくなかったけれどもね。ねえ、死んでもなお虚栄心というものは残るもんなんだね。頭はよくないって、謙遜の意味でも、実際に自分より頭がいい人なんて掃いて捨てる程いるってわかっている上でもいうけど、ぼくらはそう言いながらしかし最悪でもないって考かんえてるんだ。下には下がいるって、自分が人類で一番下ではないっ

て、意識もせずに考えながら言うんだ。ぼくだけかな。自分が人類で一番下だなんて夫は夫で不遜だろう。でもそんな自分が一番下だと理解、浸透していない謙遜が、果して謙遜と言えるだろうか？

話しが外れたね。続きを見様。夫でぼくは勉強ができなくなつて、其意味が分らなくなつて、大学に落ちたんだ。ああ、あんな顔してたんだね。心の中ではもつと愕然としていた積りだったけど、意外に顔には出てないもんだな。でもご覧よ、何度も何度も自分の受験番号探してる、見落としじゃないかと思つてる。勉強に身が入らなくて、落ちても仕方ないと、考えてた癖に本当に落ちると狼狽えるんだ。ぼくは、覚悟している積りで、実際に其覚悟していたことが襲つてくると狼狽えることが何度もあつたよ。左んなのは覚悟と号べない。でもぼくは覚悟をしている積りだったんだね。この時も左右だった。

ぼくは浪人することになつたけど、やっぱり集中できなかつたよ。このままじゃ絶対に受からないし、親に申し訳なかつたから、就職することにした。予備校のお金返しますからつて話して、免してはもらつたんだけど、母親が『車の運転をする仕事だけはやめてくれ』つて泣くんだよ。弟のことがあつてから、ぼくは母親のことだけは泣かせたくなかつた。でも、高校しか卒業してない人間が働らくには車の免許ぐらいないとつて後で分るんだけどね。

ここから見えるかな。ああ、やっぱり、ぼくが持つてる求人広告見える？ ほら、『簡単な仕事です』とか『営業の仕事ではありません』とか書いてある。あれは募集している仕事の内容について書いた紙なんだけどさ、あれを見て不動産屋の事務か何かの仕事に応募したら、実際は営業だったんだ。詐欺みたいと言えば大袈裟だけど、入社して暫らく経つてから社長に聞いたら『今の時代軟弱な男が多いせいで、うちみたいな小さい会社が営業の募集をしても仲間々集まらないからね』つて何ともない顔で言つたよ。ぼくは、結果的には、営業の仕事ができて勉強すること沢山あつて、しかも営業なんてどの仕事であろうと必要なことだから、結果的にはよかつた

とは思うけど、嘘をついたこと、その上自分を正当化して悪びれないこと、社会に出ればこんなものだろうなと思いつながら嫌悪感を消せなかった。誰も正しく生きることに興味なんてないんだ。

一人、尊敬できる先輩がいてね、ぼくは生れて初めて尊敬できる人に会えた気がしたよ。其会社は十人ちよつとの会社で、先輩は中堅ぐらいの位地に居ただけで、とにかく在らゆることに知識がある人で、役員とかから質問を受けるぐらいみんなから頼りにされていた。夫でいてそんなこと鼻に掛けずに、ぼくは不器用で頭が悪いから何度も何度も失敗して迷惑をかけたんだけど、『新人のうちは失敗するのが仕事だ。もつとどでかい失敗を持ってくるぐらいの気もちでやれ』って励ましてくれたりして、嬉しかった。

なんだか、こうして改たためて人に話したりすると、恐しく陳腐だね。よく聞く話した。慣れて来て、時々仕事帰りに飲みに誘われるようになって、先輩は酔うと言ったよ。『失敗するのはいい、いいけど、どうして左うなったのかの原因と、そうならないためにはどうしたらいいのか考えてみようか』言うことは尤で、そうだな、こう言うことやっぱりぼくが悪いんだな、ただ言われて嫌な気もちになったんだ。先輩は酔うと必ず、どんなに和やかな雰囲気でも『おれは人の失敗を気にしないけど』の一言で始めて飲みに行った数人の部下を順ぐりに面話した。時々は怒った。そうして怒った時は必ず言った。『おれは滅多に怒ったりはしないけど』

ぼくは尊敬できそうな人間が、仕事の上で尊敬できただけで、人間として尊敬できないことが嫌だったんだね、今気づいた。先輩が何度も『失敗を気にしない』っていうのは、本当はすごく気にしているから言うんだって思えたことが、『滅多に怒らない』って、わざわざ、怒るたびに言うのが、自分は怒らない人間だけど今は例外的に怒っているって示すためだけに言っているように聞えたことが、途轍もなく不愉快だったんだ。

仕事が優れていることと人間が優れていることは別なのにね。ぼくは先輩にはどう逆立しても勝てない。失敗から学べないなら、夫

は本当の失敗になってしまうつてことも、分^{わか}っている積^つりだ。でも、夫^{それ}でも、ぼくは先輩に人間として優れていて欲しかったんだ、幻想を押^おつけた。

友達に対しても、教師に対しても、上司に対しても、ぼくは尊敬し信頼し得なかった。死に対しては、無力を感じた。これらがぼくの些細な失望と失敗だ」

アセビは腕^{こまぬ}を拱^{こまぬ}いた。

「足りないな」

「何が」

「順にいかうか。まず友達だね。君は親友がいない、できたことがないと言ったね。でも親しくしてた友達はいたんだろう。例^たえば彼とか」

「日野君か。確かに、彼とは仲好^{なかよ}くしてた。中学生の時は本当に毎日一所^{いっしょ}にいたね」

「お互いの家に行つて、よく語り合つてたみたいじゃないか。こういうのを親友つて言うんじゃないのかい」

「親友というものが、一^{いっしょ}所にいた時間とか、密度で決^{きま}るとしたら、そう言えるかもしれない。でもぼくは彼を親友と感じたことはなかった、そう言った信頼をぼくは彼に置けなかった。これは当時のぼくの幼^{おさ}なさが原因だよ。ぼくは語り合いたかったんじゃない、誰かにぼくの思想を、きいてもらいたかったんだ。だからぼくが彼を信頼しなかった様に、彼もぼくを信頼しなかったと思うよ」

「ぼくは色々な人間を見てきたから比較して言うんだけど、君は友達が多い方でもないが、決して少なくもない。ほら、よく遊んで、あんなに笑っているじゃないか」

「たしかに、少なくともはなかったかもしれない。でもねえ、おかしいよ、中学生の時だけど、ぼくはぼくを含めた、友達みんなが、世間一般の人達に比べて特殊だと思つてたんだ。特別だと自惚^{うぬぼ}れてたんだよ。だからあんなに笑つて、ほら、あれは得意の顔なんだよ。何も知らなかったから、自惚^{うぬぼ}れてしまったのかな。としを重ねて、

少しずつ世界が広がると、驚ろいたよ。特別どころか、平凡な、むしろ、どちらかと言うと怠惰な人が集まっていたんだ、ぼくも含めてね。だから驚ろいた……打衝だったよ。自分も含めてなんだから。だから、彼らに就いて言うことは特にないんだ、不快にさせてしまふかもしれないけどね」

「あれは言わないのかい、『まあいい人なんだけどね』って。君達はよく、悪口した後には左右やってフォロースするじゃないか」

「いい人なのは当然のことだよ、先刻も言ったけど、判で押した様な悪人は左右いないよ。みんないい人達だった、だから笑ってもあるんだ。でも信頼を置けなかった、口先ばかりで自分の特殊性を主張したり、当り前に自分を特別なものと見做していたり、正しい人間になろうなんて考えている様には、見えなかったんだ……拗けたぼくの眼には」

「彼は」

「ああ、Y君だね。彼のことは唯一好きだったよ。彼は他の人にはない、没利害性を備えていたから、彼のことだけは、友達の中で唯一信頼してた。他の人はその様には彼を評価していなかったかもしれないけど、晩年、なんて言うかと老いてもいないのに可笑しいね、死ぬ一年ぐらい前からはぼくが積極的に連絡を取ったのは彼ぐらいだよ。でもだから、彼にはぼくのことを見限って欲しくなかった。ぼくは本当に傲慢で、愚かだね。自分が散々自尊心のもとで人を下らないと言って置きながら、数少ない信頼できる人には臆病になるんだ。だから彼には、何も蚊も打明けすることもできなかった。ぼくがこうなって彼はどう思うかな、『どうして何も言ってくれなかった』って思ってくれるかな、ぼくは、何を、言ってるんだらうね」

「君は死んだんだよ。生きている凡ての人を裏切って侮辱して死んだんだ。その事を忘れちゃいけない。さて、次は、両親だね。両親のことは、信頼できなかつた」

「両親には感謝の気もちしかないよ。生んでくれて、育ててくれて、感謝してる。母親が又『自分のせいだ』って泣いてる所を想像

するのが一番怖いよ。ぼくは、自殺する様に生れ付いた訳でも、そういう環境にあった訳でもなくて、ただ、自分で選んでそう育てて仕舞ったんだって、左右思ってる。でも左様なのが母親に取って何の慰さめになるだろうね。父親にも、すごく感謝してる。育ててくれて、沢山の世話をしてくれて、有難うと言いたい。彼らが老いたら、もし介護が必要になったら、絶対に自分がする積りだったよ。沢山の恩を返したかった。恩どころか、悲しみを与えて、どうしてぼくは生れてきたんだろう」

「其答は生きている内に見つけ出すべきだったね。うん？ 君は、あれ、何してるの」

「ああ、遺書を書いてるんだよ。死のうとしたことは、一度や二度じゃない。仕損なう度に破いて捨てたけど」

「君は、一人暮し？」

「そう、就職して、二十歳の時に家を出たかな。死んだのが二十五だから、五年間か。あの家に五年も住んだのか」

「自殺を試みたのは一人暮しをしてから？」

「そう、言われるとそうだね、死ぬことはずっと昔から考えていた気がするけど、具體的にどうやって死ぬかを考え出したのは実家を出てからかな。最初は睡眠薬で苦しむことなく死にたいなんてばかげたことも考えたけど、その内、自殺なんてばかげたことをするなら、苦しんで、恐怖して死ぬと思うようになってやめた。手を切ろうと初めてしたのは高校生の時だと思うけど、これは死に損なうことも多くて、しかも痕に残るのが嫌だから結局試しもしなかったな。電車で飛び込むのは、沢山の人の目に着いてしまうし、嘘か本当か賠償金が凄い額になるとも聞いて、やめた。車に飛び込むのも轢ねた人に非常に不愉快を与えるだろうなあと思った。まあスピード違反のスポーツカーに当るのは一興かなあとも考えたけどね、車に轢かれるのは死ぬ要素としては不確定な所が多い気もしてね。事故死するにはどうしたらいいかと真剣に考えたよ。崖から足を滑らして落ちたらどうかとか、雪山で遭難してみようかとか…：

怖かった、死ぬのはとても怖かったよ。でも生き続けるのも怖いだ」

「今日死ねない人間は明日生きるしかない。遺書にそう書いてるね」

「そう、書いて、ほら、捨てたね。のどを搔き筆^{むし}ってる。傍^{はた}から見ると滑稽^{こっけい}だね。ばか丸出した。今日死ねない人間は明日生きるしかない、死に損なうたびにそう思って生きてきたよ。でも、最後まで、思い続けることはできなかった」

「最後の遺書はなんて書いたんだい」

「ほら、あれだよ」

「何々、『執着して、期待して、長く生きすぎた。命をのぼしてしまった。この拙筆を見ればわかるだろう。歪んでいる。どうしてそれに気がつかなかった。もっと早く死ぬべきだった。命をのぼしてしまった。少し遅く終^{おわ}った。ただそれだけのことだ』遺書だったら両親への感謝とか、謝罪とか、書き給^{たま}えよ。だから自殺なんてするんだよ」

「言葉もない。両親のこととか、Y君のこととか、書こうと思っただけだね、書けば羈^{いましめ}になる様な気もして……」

「夫^{それ}に、書いてない、言っていないことがまだあるだろう」

「何のこと」

「顔が強張^{こわば}ったじゃないか。分^{わか}っているんだろう、恋人のことだよ」

「恋人」

「そうだ」

アセビは黙って私が言うのを待った。何年でも待ち続けるつもりだろう。私は言った。

「元、恋人だよ。言って置くけど、ぼくは彼女が去ったから死んだ訳じゃない。彼女と、会えたから、今まで生き続けてきたんだ。精一杯生きるつもりだった。彼女が、ぼくの命をのぼしてくれたんだ」

「出会いは」

「同じ職場だったんだよ。彼女は事務で、ぼくよりも先に入社していたから、分らないぼくに色々世話を焼いてくれた。年は一つ上だったな。優しい人だったよ。気も利いて、頼りになるし、どうしてぼくなんかを選んできたのかふしぎな位だった。三年くらいつき合ったかな、或日、けんかして、この所けんかが続いていて、或日、去って行ったよ。どうして思い出させる」

「隠し事はなしだよ。さて、じゃあ、彼女のこととは信頼し、尊敬していたということでもいいのかな、人間として。正しく生き様とする一人の人間として」

「どうして意地の悪い聞き方をする。彼女は、普通の、女の子だよ。別に正しく生き様としていた訳じゃない。でも、いい人間だった。生れ持った性質か、両親の影響か、多分其どっちもだと思うけど、単純に善良で、ぼくなんかより、ずっといい人間だった。だから好きだったんだ」

「今、生れ持った性質もあると言ったね。君はさっき、自分が自殺したのは自殺する様に生れ付いたからじゃあないと、だから両親の所為じゃあないと、そういう口振りで言ったけど、矛盾しているね。生れ持った性質は、其人間に影響を及ぼすの及ぼさないの、どっち」

「どうして、責めるんだよ。どうして死んでまで責められなきゃいけないんだよ。そんな矛盾いいじゃないか、矛盾なんて世界に溢れているじゃないか」

「世界に溢れていることと、君個人とは、別の話だよ。そんなことも分らず生きてきたのか？ 君は恋人が命をのぼしてくれたと言ったね、でも遺書には命をのぼしてしまったと書いてる。くれたのか、しまったのか、どっち」

「どっちもだよ！ 命をのぼしてしまっただ、もっと早く終えていれば誰にも迷惑を懸けずに済んだ、命をのぼしてくれたんだ、生きていて、よかったと思えたんだよ。拗けたぼくでも思えたんだ、

夫が嬉しかったんだよ」

「もっと早く終えていれば誰にも迷惑をかけずに済んだ？ 夫は具體的にいつ、何歳の時に死んでいればそんな奇跡みたいなことが起るんだい。君の遺體を見付けたのは誰だ？ 君の血を掃除したのは誰だ。君に部屋を貸したのは誰だ。君を雇ってくれたのは誰だ。君と契約してくれたのは誰だ。そうか、仕事を始めるよりも前に、海にでも身を投げていれば誰にも迷惑がかからなかったって言うんだね。でもその遺體がどこかへ流れ着いたら？ 山奥で遭難して其遺體を誰かが見付けたら？ 遺體が見付からなければ君の両親が搜索願を出すかもしれない。夫に費やした警察官や御両親の労力は？ 心配は？ 死んでまで責められなきゃいけない？ ふざけるなよ。死んだから責められるんだ、抛棄したから責められるんだ。まあ、君の甘ったれが分つたから激するのはここまでにしておこう。ところで、今迄の話しをまとめてみても、今一ぼくには君が自殺する理由が分らないんだ。何もかもを打明けられる訳じゃなくても、信頼している友達もいて、両親に感謝もしていて、命をのばしてくれた恋人も、去って仕舞ったにしろいて、もう一度死んだ理由を教えてくれるかい」

「人間が嫌いだから」

「それは、数少ない彼らのことも本当は嫌いだったという解釈でいいの」

「そうじゃない、彼らは、多くの人間の中で、本当に数少ない好になれた人達で、でも、本当は、左右だよ、友達も同僚もそれ以外の人間が全員嫌いなんだ。仲が好かろうと笑っていようと関係ないんだ。嫌いなんだ憎んでいるんだ知人も他人も関係ないんだ。醜くいじゃないか。愚痴と、不満と、怒り、虚栄心、自己主張、欺むき、人間の、違いから来る、徹底的な不理解！ そうだよ、おれは、みんながおれじゃないからいらついているんだ。一番醜くいのはおれだよ、だから誰も彼もが醜く見える。どうして正しく生きられない！ 人間が嫌いなんだ、自分が嫌いなんだ、だから殺した」

「君は過去の遺書で、自分を好きでいて上げ様という君の時代の風潮を難じているね。では、夫に敗北したという解釈でいいのかな」

「死んだら負けだよ。おれはまちがってた」

私は項垂れ、膝をついた。数少ない好になれた人達に、ありがとうを一度、後はごめんなさいをつぶやき続けた。鋭利な石が落ちていた。手に取りもう一度頸を切ろうとしたが、皮膚を破るあの恐怖と苦痛を思い出し、そのまま何年もためらっていた。